



営農NEWS



水田除草剤の省力散布 一剤型とその特性について

水田で利用される除草剤の処理には、近年、多様な剤型や処理法が登場してきました。従来は、散粒器の利用などで散布した粒剤（1キロ剤や3キロ剤）や特定容器内の原液を一定間隔で振って散布するフロアブル剤が多く利用されてきました。近頃は更に、粒剤の一種として畦畔から面積当たり一定の個数を投げ込むジャンボ剤や水田内に一定量（250g/10aなど）ずつ投げ込む豆つぶ剤、また、フロアブル剤や顆粒水和剤を利用して入水時の水口に一気に投入する水口施用、田植えと共に専用機械で散布する田植同時散布など種々の剤型や処理法が導入されています。

これらの剤や処理法は、それぞれに利便性や省力性を備えています。一方、注意すべき点も持ち合わせていますので、その特徴と使用上の注意点について紹介します。

<除草剤の効果を高めるポイント>

- 1 田植え後の活着が良好になるよう、健苗を育てましょう。
- 2 代かき作業は丁寧に行って凸凹のない均平な田面にし、水口や水尻を止め、また、漏水を防いで湛水を保ちます。
- 3 前年に発生していた雑草の種類や発生時期を検討し、それらに適応した除草剤を選んで処理します。
- 4 処理する除草剤の使用法、注意事項等をラベルでよく確認し、効果を発揮する時期や量などを守って、薬剤を均一に処理します。
- 5 薬剤処理後7日間は落水しない、止水管理（田面が露出した場合は、補充分を静かに継ぎ水かんがい）とします。

	特 性	注 意 点
1 田植同時処理	1 田植機に専用の散布機械を装着し、田植えをしながら同時に散布処理する方法で、労力が大幅に軽減されます。なお、使用できる除草剤は、 <u>使用時期に「移植時」の登録がある薬剤に限られます（使用時期が「移植直後」しかないものは不可）。</u> 2 剤型として、粒剤とフロアブル剤用の散布装置があります。	1 散布機械の量調整を適正にして、撒きすぎに注意します。 2 適正な植付深さ（2～3 cm）にします。浅植えや浮苗、土の戻りが極端に悪い水田では薬害の生じる恐れがあります。また、移植後は速やかに入水し、補植は原則行いません。
2 ジャンボ剤	1 特殊な粒剤や顆粒を 25～50 g 単位で水溶性フィルムに包装し、10 a 当たり 8～20 個を直接に水田畦畔から投げ込む製剤で、水中（水面）での拡散機能が高いため、ムラなく均一な処理が可能です。	1 散布時の水深は、少し深めの 5 cm 程度が目安です。 2 田面が均平でない水田では、拡散が妨げられるので、改善してください。 3 藻類や表面はく離の発生が多い水田では、早めの散布に心掛け、多発生している場合は散布を控えます。
3 豆つぶ剤	1 軽量化された発泡性の大型錠剤を、規定量（10 a 当たり 250 g など）をそのまま水田畦畔から手まきやひしゃく等で投げ込む製剤で、水中（水面）拡散機能が高いため、ムラなく均一な処理が可能です。	1 散布時の水深は、少し深めの 5 cm 程度が目安です。 2 田面が均平でない水田では、拡散が妨げられるので、改善してください。 3 藻類や表面はく離の発生が多い水田では、早めの散布に心掛け、多発生している場合は散布を控えます。
4 フロアブル剤・顆粒剤	1 フロアブル剤は原液を、顆粒水和剤は調整した希釈液を専用の容器で、水田畦畔などから歩行しながら本田内に直接手振り散布します。 2 圃場に散布する全量を、入水時の水口に一気に投入して水田全面に拡散させます。（水口施用）	1 手振り散布の場合は、ジャンボ剤や豆つぶ剤と同様の注意が必要です。 2 水口施用は、3 cm 以上の水深で水尻を止め、所定量の薬液を水口に処理して給水し、湛水深が 2～3 cm 上昇したら止水して湛水状態を保ちます。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040